

7 不当な左遷理由

以上、道真の生涯を大まかにのべてきた。では、このように天皇の御信任も厚く、国家のために精一杯尽くしてきた道真が、なぜ突然失脚させられたのであろうか。この問題については、古来さまざまな説が出されている。すでに中世から議論があり、江戸時代にもいろいろ異なることがいわれ、また明治以降にも数多くの著書・論文が発表されている。しかし、それをいちいち紹介する時間もないので、それらをふまえた私見を、簡単に申しのべたい。

まず一つは、昌泰四年（延喜元年）の正月二十五日に出された宣命に、左遷の理由として「菅原朝臣ハ寒門ヨリ俄ニ大臣ニ上リ給ヘリ。シカルニ止足ノ分ヲ知ラズ、専権ノ心有リ。……」とされるされている。

つまり道真は、低い家柄に生まれながら大臣にまで昇り、身の程を弁えないばかりか、権力を専らにしようとする野心がある、という思いもかけない非難である。

けれども、道真が身の程を弁えなかったはずはない。この点に関して問題になるのは、前年の昌泰三年十月に文章博士の三善清行が道真に奉った書状である。それは同じ学者仲間としての親切心から、道真に辞職を勧告するという文面になっているが、そのなかに「伏シテ冀ハクハ、其ノ止足ヲ知り、其ノ榮分ヲ察セヨ」という言葉が出てくる。

そこで、古来この「止足ノ分」ということを問題にする論者は、こういう勧告があったにもかかわらず、依然として右大臣の地位に居座っていたから、それを妬まれて左遷されたのだという。しかし、これは事の表面しかみない誤解であって、道真はすでに大納言・右大臣を拝命したときも、自分は本来学者であるから、どうかそんな高い官職につくことは辞退させていたきたいと願っていた。

これは一面、当時の儀礼であって、儒教的な謙讓の美德をあらわすにすぎない、という見方もある。けれども、その辞表をみると、こういう地位は自分にふさわしくない、ので、ぜひとも辞退させていたきたいと、心の底からのべているように感じられる。それにもかかわらず、当時は道真以外に右大臣の大任を担う人がいなかった。め、やむなく非常な覚悟で引き受けたのであろう。

その道真に対して、いまさら辞職勧告するのは見当違いといわざるをえない。もし

それを承知の上でやったのだとすれば、むしろ結果的に道真を窮地に立たせる軽率な言動か、もしくは反道真派による一種の陰謀ではないかとすら思われる。ともかく道真自身は、「止足ノ分」を弁えながらも、退くに退けない立場に追い込まれ、苦しんでいたにちがいない。

もう一つ、さきの左遷宣命には、「佞諂ノ情ヲ以テ、前上皇ノ御意ヲ欺キ惑シ、然モ上皇ノ御情ヲ恐レ慎マデ奉行シ、敢テ御情ヲ恕ルコトナク、廢立ヲ行ナヒ、父子ノ慈ヲ離間シ、兄弟ノ愛ヲ淑破セント欲ス」とある。つまり道真は、宇多上皇の恩情につけ込んで、醍醐天皇の廢立を計画したということが、左遷の理由に挙げられているのである。

この点も、古来いろいろ議論されているが、もしこれが事実であれば致命的なことであるから、慎重に検討してみたいと思う。

この問題に関する決定的な史料は、『扶桑略記』という編年歴史書の延喜元年七月十日条に引かれている『醍醐天皇御記』の逸文で、そのなかに左のような藤原清貫の復命書がみえる。これは、道真配流の半年後に、醍醐天皇が道真のことを心配して、清貫を宇佐神宮へ奉幣使として遣わされたさい、大宰府に立ち寄って道真の様子を窺

わせられた、その報告書である。

宇佐御幣使清貫、復命ヲ奏シテ、又云ク、帥（大宰権帥）菅原朝臣ノ気色ヲ候フニ、殊ニ窮体ヲ示ス。前日ノ言意、既ニ理ニ伏スルニ似タリ。其ノ詞ニ云ク、自ラ謀ル所ナシ、但シ善（源善）朝臣ノ誘引ヲ免ガルルコト能ハズ、又仁和寺（宇多法皇）ノ御言、シバシバ承和ノ故事ヲ奉ズル有ルノミ、ト云々。

これによれば、配所の道真はことにやつれた様子で、前日の「言意」について申し開きをしたが、それによると、自分で計画したことはないけれども、源善朝臣の「誘引」を断わることができなかつたし、また宇多法皇がしばしば「承和ノ故事」を引きあいに出してお話をなさることはあつた、というのである。

では、この「善朝臣ノ誘引」とか、宇多法皇の話された「承和ノ故事」とかいうのは、いったいなんであろうか。これを従来の解釈によつていうと、源善は宇多法皇の側近の一人であるから、この男が醍醐天皇を廢して別の天皇をたてることを計画し、道真を引っぱり込もうとしたのだ、という見方になろう。また宇多法皇も、そのことに賛成しておられたから、しばしば「承和ノ故事」を語られた、承和の故事とは承和

の変にほかならない、ということになる。

このうち、善朝臣の誘引については憶測のほかないが、もし承和の故事が承和の変だとすれば、廃立事件をおわせる話だという疑いが強くなる。承和の変とは、承和九年（八四二）に、伴健岑や橘逸勢らが仁明天皇を廃して、代わりに皇太子恒貞親王を立てようとした、という疑いで捕らえられた事件である。だから、もしこの事件が引きあいに出されていたのであれば、醍醐天皇を廃立するような計画もあった、ということにならざるをえない。

しかしながら、承和の故事をただちに承和の変と結び付ける必然性はないのである。逸文として伝わる醍醐天皇の御日記を私は仔細に検討したが、「承和ノ故事」については、ごく自然な解釈をくだすことが可能であると考えている。

その前に、そもそも源善という人物は、宇多天皇に可愛がられた五位蔵人であるが、それほど政治力があつたとは認められない。そんな程度の役人が醍醐天皇を廃立するような計画を企てたり道真まで誘うというようなことは、ほとんど考えられない。もしありうるとしたら、やはり仁明天皇のような、文人を重んずる文運の盛んな時代の再現を夢見ていたのではないか。

一方、宇多上皇も道真も、醍醐天皇の立太子や即位を積極的に実現させた当事者であるから、その天皇を廃立するようなことは、まったく思いもよらないことであつたにちがいない。

そこで、あらためて「承和ノ故事」という言葉の使い方調べると、同じ醍醐天皇の御日記に、何度も似た表現がみえる。「承和ノ故事」だけでなく、「貞観ノ故事」とか「元慶ノ故事」といった、年号を冠して何々の故事という言い方が、しばしば出てくるのである。

そういう場合の故事とは、先例という意味にすぎない。しかも御日記を詳しくみていけばわかるように、仁明天皇の承和時代、あるいは清和天皇の貞観時代における、宮中の儀礼をおもに指している。

念のために、「承和ノ故事」という言葉の用例を一つ挙げれば、延喜十年（九一〇）正月二十二日の御日記に、「承和ノ故事ニヨリ弦歌ヲ奏セシム」とある。承和の先例によって管弦を演奏せしめたというのであるから、いわゆる承和の変などとむすびつくはずがない。

つまり、承和の故事というのは、仁明天皇朝のような文運の盛んな時代の先例、という以外の何物でもないのである。文雅を好まれた宇多法皇のことであるから、当然そのような承和の故事先例を、道真や源善にもしばしば話されていたであろう。しか

し、それは時の天皇廃立^{はいりつ}というような生臭い^{なまぐさ}計略^{けいりやく}となんら関係のないことであつたに
ちがいない。

菅原氏・皇室・藤原氏の略系図

